TADOKU JUNIOR　アンデルセン童話　★★★☆☆ ふつう　308語

The Snow Queen (5)

雪の女王（その5）

Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)（1846年の本）　原文そのまま　朗読：Jennifer Dorr

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　長い旅を終えたカイとゲルダは、春の道を通って、なつかしい町へ帰ってきます。おばあさんの部屋で、二人が気づいたこととは……。『雪の女王』の最終回です。



“Oh! The Raven is dead,” she answered. “His tame sweetheart is a widow, and wears a bit of black worsted round her leg; she laments most piteously, but it's all mere talk and stuff! Now tell me what you've been doing and how you managed to catch him.”

And Gerda and Kay both told their story.

And “Schnipp-schnapp-schnurre-basselurre,” said the robber maiden; and she took the hands of each, and promised that if she should some day pass through the town where they lived, she would come and visit them; and then away she rode. Kay and Gerda took each other's hand: it was lovely spring weather, with abundance of flowers and of verdure. The church-bells rang, and the children recognised the high towers, and the large town; it was that in which they dwelt.

They entered and hastened up to their grandmother's room, where everything was standing as formerly. The clock said “tick! tack!” and the finger moved round; but as they entered, they remarked that they were now grown up. The roses on the leads hung blooming in at the open window; there stood the little children's chairs, and Kay and Gerda sat down on them, holding each other by the hand; they both had forgotten the cold empty splendor of the Snow Queen, as though it had been a dream. The grandmother sat in the bright sunshine, and read aloud from the Bible: “Unless ye become as little children, ye cannot enter the kingdom of heaven.”

And Kay and Gerda looked in each other's eyes, and all at once they understood the old hymn:

“The rose in the valley is blooming so sweet, And angels descend there the children to greet.”

There sat the two grown-up persons; grown-up, and yet children; children at least in heart; and it was summer-time; summer, glorious summer!

「ああ！カラスは死んじゃったわ」とむすめは答えました。「人になれたいいなずけはやもめになって、足に黒い毛糸を巻いているの。とってもかわいそうになげいているけど、そんなのみんな口先だけよ！さあ、今度はあんたが何をしてきたのか、どうやってこの子をつかまえたのか話してよ。」

そこでゲルダとカイは、二人で自分たちのお話をしました。

すると山ぞくのむすめは「シュニップ・シュナップ・シュヌレ・バセルレ」と言いました。そして二人の手をとって、いつか二人の住んでいる町を通ることがあったら、たずねていくと約束しました。それから、馬に乗って行ってしまいました。カイとゲルダは手をとり合いました。花がいっぱいさいて、緑のあふれる、すてきな春の日でした。教会のかねが鳴りました。子どもたちには、高い塔と大きな町に見おぼえがありました。それは二人の住んでいた町でした。二人は町に入り、急いでおばあさんの部屋にかけあがりました。そこでは何もかもが、前とそっくり同じようにおいてありました。時計は「チク、タク！」と鳴り、針がまわっていました。でも、部屋に入ったとき、二人は自分たちがもうおとなになっていることに気がつきました。屋根の上のバラが、開いた窓から花をさかせてたれさがっていました。そこには子どもたちの小さないすがあって、カイとゲルダは手をとり合ってそれにすわりました。二人とも、雪の女王の冷たくがらんとしたきらびやかさのことは、まるでゆめだったかのようにわすれていました。おばあさんは明るい日の光の中にすわって、聖書を読みあげていました。「あなたがたが幼な子のようにならなければ、天の国に入ることはできない。」

カイとゲルダはおたがいの目を見つめ合いました。すると二人は、とつぜんあの古い賛美歌の意味がわかったのです。

「谷間のバラは　かおりよくさき、天使がおりて　子らをむかえる。」

そこには二人のおとながすわっていました。おとなだけれど、子ども。少なくとも心は子どもでした。そして季節は夏でした。夏、すばらしい夏でした！

たんご と クイズ 雪の女王（その5）

church-bells 教会のかね	**clock** 時計	**chairs** いす
roses バラ	**summer** 夏	

Q1 カラスのことを聞かれた山ぞくのむすめは、何と答えた？

① 王さまになった　② 南の国へとんでいった　③ 死んでしまった

Q2 おばあさんの部屋に入ったとき、カイとゲルダが気がついたことは？

① 部屋がこわれていた　② 自分たちがおとなになっていた　③ バラがかれていた

Q3 物語の終わりの季節は？

① 夏　② 冬　③ 秋

こたえ

Q1 ③ 森のカラスは死んでしまい、いいなずけのカラスは足に黒い毛糸を巻いてなげいている、とむすめは話しました。

Q2 ② 部屋は前とそっくり同じでしたが、二人は自分たちがもうおとなになっていることに気がつきました。

Q3 ① 最後は「夏、すばらしい夏でした！」で終わります。心は子どものままの二人に、夏がおとずれました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #1597（Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)、1846年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Jennifer Dorr（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。